

保や、その維持のための国民の教化という役割を担うものとしての性格が付与されたのでした。

参考文献

- 今井孝司「戦時下日本の厚生事業再考・物質的貧困から人的貧困への転換」『東洋史訪』兵庫教育大学東洋史研究会、二〇〇八年）
- 右田紀久恵・高澤武司・古川孝順編『社会福祉の歴史』（有斐閣、一九七七年）
- 吉田久一「現代社会事業史研究」（勤草書房、一九七九年）

浄土宗義の現代化をめぐる

——『浄土教報』誌上における現実的感化論争

吉水岳彦

明治後期の日本は、戦争や飢饉などの影響から社会は混乱し、多くの貧困層を生み出しました。この社会情勢に応じて、内務省関係者は、明治三十三年（一九〇〇）に貧民研究会を発足し、これを皮切りに慈善事業の組織化を進めました。明治四十一年（一九〇八）には中央慈善協会が設立され、感化救済事業講習会が開催されたときには、仏教関係者にも参加を呼びかけたのでした。

浄土宗僧侶による感化救済事業・仏教社会事業も、そのような国の動きと重なるようにして組織化されていきます。明治三十三年には浄土教報社内に「浄土宗慈善会」が設置され、明治四十四年（一九一〇）には浄土宗労働共済会が設立され、大正三年（一九一四）には浄土宗報恩明照会が設けられました。そして、大正期に至って渡辺海旭（一八七二—一九三三）をはじめとする浄土宗僧侶によって、盛んに社会事業が展開されていったのです。

そのような浄土宗僧侶による社会事業の展開の背景には、浄土宗の現代化・社会化についての盛んな議論がありました。当時の仏教各宗は、すでに社会事業を展開していたキリスト教との比較に晒され、加えて、頻発していた自然災害に対する仏教寺院・僧侶側からの対応が問われていました。浄土宗も宗義上において社会に対する実質的な利益・現実的な感化とは何かを模索せねばならなかったのです。当時、浄土宗の公示、教団の活動、公私の消息などを宗内に伝える役割を担っていた機関紙が『浄土教報』です。この『浄土教報』誌上において、明治四十年（一九〇七）から同四十二年（一九一〇）にかけて行われた浄土宗における現実的感化のあり方をめぐる論争は、そうした議論の一端といえるものです。ここではこの論争に着目し、その経過を整理するとともに、当時の議論の中心となった浄土宗の現代化をめぐる問題点について考察を試みます。この浄土宗における現実的感化論争の結末は、決してすっきりした回答を与えてくれるものではありませんが、昨今、宗教における社会貢献が議論されていることを勘案するならば、現在にも通ずる重要な課題を教えしてくれるものです。

### 一、「浄土教報」誌上における現実的感化論争の経緯

明治四十年（一九〇七）八月の『浄土教報』七六一号に「仏教の現実的感化」という社説が発表されました。この社説において、そもそもの仏教の使命は崇高な教理そのものよりも実際に現実的感化を人々に与えることにあるが、現代の仏教徒は理屈に奔ってその使命が果たせていないのではないかと

う問題提起がなされます。そして、執筆者豊岡博道氏（とよおかひろみち一八七五—一九三五）は、キリスト教のように人心感化の直接方便として社会的事業に重きをおく点にも注意を払い、今一度仏教徒も現実的感化について工夫を凝らし、自己の修養・人格的感化を考える必要を述べています。

これについて一連の論争の火種となったのは、明治四十年九月七六六号に発表された、「浄土教徒」と名乗る人物による社説の所感「仏教の現実的感化」を讀みて」の内容でした。「浄土教徒」は、ただ死後の幸福を第一目的として宗教を求める人は甚だ少なく、もし浄土宗が「一枚起請文」の肝要な一句をもって至極とするならば、救いの対象は瀕死の老人にかぎられ、すべての人々を平等に救うことは疎か、先の世の人まで救うなどということとはたわごとと過ぎないとまで述べています。「浄土教徒」は、光明の現世的利益が第二義で、未来の受樂・死後の救済である極樂往生を第一義とする旧来の浄土宗の教えでは、人生の現実に即すものにはなりえず、現代の趨勢に応じた教化、すなわち道德の新健闘たる實際的活感化事業こそ価値あるものであると主張したのです。これに対して、翌月七七〇号において佐和真氏（わかつま生没年不詳）「浄土教徒の現実的感化を讀みて」を讀みて、同年一二月七七七号において釧路に住む宗学者妄想比丘が「浄土教徒氏に与ふ」を発表して反論を試みています。「浄土教徒」の所信があまりにも非浄土宗的・非仏教的であるため、念仏は万人に平等往生の救いを得させるもので、瀕死者にかぎられる救いではなく、浄土宗義は死後の往生、来世の利益を説くことによって現実社会を善道に導くものでもあることを主張します。

この佐和・妄想比丘両氏の反論を受けて、「浄土教徒」は明治四十一年（一九〇八）一月、七八一号において「衷心の要求（妄想比丘師に対ふ）」という長文を発表し、浄土宗の教えは極言すると念仏によつ

て極楽を買うということの他には何ら人生的意義がなく、人生の現実生活には没交渉・無関係であり、死後往生を求める念仏者において道徳が育まれることも、向上心が起こることもなく、一般健常者に通じない教えであると、再び旧来の浄土宗義を厳しく批判したのでした。佐和は翌二月、七八六号において「浄土教と現代思潮(上)」を、妄想比丘は七八七号において「再与浄土教徒氏」という一文を発表し、浄土宗が死後の往生浄土を第一の目的としている点を時代思潮に流されて曲げることが許されないことを述べています。

ここまでは主に浄土教徒と佐和・妄想比丘の議論でありましたが、七八七号に青木緑溪が「浄土宗現実的感化に就て」を、七八八号に寒苔生が「浄土教徒の君へ」を、同号に柳郷生が「現実的感化に就ての所感」を発表して議論に参入しています。青木は「浄土教徒」の主張が浄土宗義を根本的に破壊させようとするものであるとの厳しい批判を行いました。寒苔生と柳郷生はそれぞれ「浄土教徒」と妄想比丘の主張が双方極端なものであると評し、浄土宗徒のたもつべき本義・要点を述べています。三者の参入は、現実的感化に対する宗内僧侶の注目度の高さを示すものでしょう。また、寒苔生と柳郷生の意見にいたっては、「浄土教徒」の過激な発言への単純な批判ではなく、現世本位志向の現代人に向けた新たな教化方法の確立が急務であるという「浄土教徒」の危惧を受け止めた上で、伝統的宗義の普遍的価値に触れる内容となつていくことがわかります。

明治四十一年三月、佐和は七九〇号に「浄土教と現代思潮(下)」を発表しました。これまで論じられてきた現実的感化に関する議論は、浄土宗の重大な教学問題であり、さらに慎重な議論が求められることをここで明確にしています。そして佐和は、この世を厭い離れ、極楽浄土を欣い求める「厭離穢土欣

求浄土」という教理を消極的な教理と「浄土教徒」が捉えてしまうのは、努力主義の現代思潮から考えればもつともなことであると一旦理解を示した上で、「厭離穢土欣求浄土」の現代的意義を説明しています。佐和の投稿の後、七九〇号の「心胸打開録」というコーナーでは、現実的感化についての研究が急ぎ求められており、念仏と善行の調和一致についての更なる議論が必要であるとの意見がだされています。念仏と善行(社会的事業)の関係については、宗義・教学上の問題としてより具体的な考察が求められていたことが推察されます。

複数の人物からの指摘や意見を受けて「浄土教徒」は、自身の信仰をまとめて七九二号と七九三号に続けて「一味の信仰」というタイトルで発表しています。ここで、未来の往生浄土のためだけに心身を阿弥陀仏に託すのではなく、現世を仏の光明の中に過ごし、如実に人生を謳歌し、嵩美な帰依の情感に充ちた生活を行うべく称名念仏の日々を送る等、「浄土教徒」は現世と来世の両方に念仏が力あるものであることを論じています。また、教理の改竄ではなく信仰の進歩として、時代思潮と融け合うべきことを述べています。結局、「浄土教徒」は佐和の「厭離穢土欣求浄土」説に同感するものの、浄土宗の教義信仰について言い尽くせないほどの想いが残ったようです。しかし、これを再び誌上に発表することとはなく、求道者として自策自励し、自らの最上を求めてゆくとの決意を述べて筆を置いていきます。

論争自体はこの「浄土教徒」の信仰告白で一旦終結します。そして論争の直後、「浄土教報」誌に浄土宗としての感化救済事業の訓示が発表され、宗内寺院・僧侶による貧困や災害の救援といった社会的活動が活発化していきます。議論された宗義の現代的解釈に関する問題に、決して明確な答えが提示されたわけではありません。しかし、社会からの要請に直接応えながら議論していく他なかったのです。大きく容

する社会において、実際の浄土宗の存在価値が問い直され、普遍的な価値の提示と時代思潮の変化に応じた教化方法の双方が強く求められたということでしょう。それは、この論争が終結した翌年も、宗義と国体の一致融合をめぐる論争として再び同様の宗義問題が取り沙汰されたことでも明らかです。

## 二、論争に取り上げられた浄土宗義の現代化をめぐる問題点

以上見てきたように、論争では仏教的、浄土宗の現実的感化のあり方をめぐってさまざまな意見が取り交わされました。その議論の中心は浄土宗義の現代化をどのように考えるかであったわけですが、とりわけ、宗義の根幹である未来の往生浄土を第一義とするか、現世的利益を表に掲げるかが争点となりました。この問題は、現世を浄土と捉えるのかどうか、往生を精神的更生と捉えるのかどうか、念仏と社会的事業はどのような関係にあるのかなど、さまざまな教義問題に派生していきました。また、社会活動等を重視し、現世の救済に力を注ぐキリスト者と未来の浄土における救いを説く浄土宗僧侶との比較等も行われました。

まず宗義の批判者である「浄土教徒」は、往生を願う信仰は自利といっても過言ではなく、事実、利他的精神を欠く念仏者の未来中心主義的な思想が我利我利亡者の現代人を救い導くことなどできないと述べています。加えて、浄土宗のような未来主義的思想をもたずとも、倫理的熱誠の行為をもって人を導くときには宗教以上に活感化となるのであり、往生のことなど阿弥陀仏に任せておけばよいことで、ただ念仏にいそしむそのことが救いであり、今日一日今時一頃が尊ぶべき得がたき至上の生命であると、その独自

の念仏観を披瀝しています。念仏によって苦しみや迷いに満ちたこの世の生死を離れるという浄土宗的救済・解脱ではなく、念仏による現実人生の救済・解脱の教え(出離生死<sup>II</sup>精神的更生)こそ重要であり、進歩発展した社会、乱調無極の時代精神を統べるものであると訴えています。こうした現世における浄土往生(現生正定聚)の思想を有し、現世中心主義的な思想をもつ浄土宗僧侶は、この時代に少なからずあったかもしれません。そして、これをもつて浄土宗義の現代化、現代的教化とした者があつたのです。

このような浄土宗義の現代化論に対し、佐和や妄想比丘、青木等は、時代思潮に迎合して宗義を根本から改変してしまうのではなく、宗義のもつ普遍的価値を明示し、現代的にも意義深いものであることを主張し、さらにその信仰と社会的事業との関係についても言及しています。その要点を挙げれば次の通りです。

### ① 仏教の目的にかなうのが極楽往生であること

浄土宗義が死後の往生浄土を第一義とすることの前提として、仏教の目的が生・老・病・死という苦を完全に離れること、すなわち出離生死(解脱)にあり、苦しみや執着の多い現実人生そのものを対象とすることはありえない点を挙げています。仏教者において人道の救済実践は、あくまでも解脱へ至る準備・手段に他なりません。浄土宗の第一義である往生浄土は、仏の力によって得られる万人平等の救いであり、出離生死が目的である点を強調しているのです。

### ② 浄土宗による精神的感化・現世利益は安心立命にあること

安心立命に喜びを得るのが現実的利益であり、念仏行者にとつて極楽往生を第一目的とすることは必然のことです。生きていけるうちは向上霊感(精神)の飢渴を潤し、死後は救済往生の利益を蒙る

のがすなわち浄土宗の現実的感化です。

③ 現世は穢土であり、厭うべきものであること

努力主義が世に広まり、常に奮励すべきことをうながす社会においては、厭離穢土を単に現実から目を背けた厭世的考えで、意志の弱い人や、世に認められない人のための思想と捉える人も多いでしょう。しかし、釈尊の時代から法然上人の時代を経過した現代においても、現実の世は樂觀できない浄土とは異なります。愛欲の広海・名利の大山に迷い、人に信なく、罪惡の世に行われるのを見れば穢惡の土であることは間違いないありません。この穢土を厭い浄土を求めることは人の情にもかなうものであり、進歩向上を示すものでもあります。

④ 浄土宗の教えこそ現代人を善導するものとなること

「現代が黄金万能主義で我利我利者ばかり」である原因は、無常の迅速なことや来世の苦樂を知らないためであります。現世利益は執着心を増し、益々これを助長させるが、因果の道理と来世の浄土往生（樂果）を教える浄土宗の教理は、これを治す大妙藥となるものです。

⑤ 浄土宗はキリスト教と教化の方向が異なっていること

浄土宗は未來教であり、キリスト教は現實教です。この事實は変えようのないものであり、社会的事業のような現実的感化を重視し、第一義の極樂往生を価値の低いものと考えるのであれば、もはや浄土宗の信仰者とはいえません。あくまでも死後に極樂浄土へ往生することが信仰の要諦であり、滅罪生善といった現実的感化は、仏の心光に攝取されている仏弟子が蒙るべき不求得のものです。念仏者に不徳の人や罪人が少ないのは、そうした不求得の利益により倫理道徳も自然と遵守され

ているからです。

⑥ 浄土宗における現実的感化（社会的事業）は信仰に基づいて行われるものであること

多くの人は常ならぬ世の悩み、浅ましい心の罪の自覚より信仰に入るものです。悩みあるこの世を穢土といい、罪ある身を穢身といい、これを厭い離れることが厭離穢土の思想です。すなわち、浄土宗の総安心である厭離穢土の思想は信仰への入口といえます。そして、世の暗さや人の罪に泣き、ついに涙を払って如来大悲の懷に赴くことを欣求浄土といえます。こうして厭離穢土から欣求浄土へ進み、仏の慈悲の懷に入り、仏の光明に照らされた信仰生活を確立すれば、自然と俗世間を救おうとするようにもなります。

以上のように、浄土宗義の現代化論が登場するなか、単純に社会的事業を展開することで人心感化を進めようとするのではなく、本来の宗義に基づいた形の現実的感化（自己の修養・人格的感化）を考えるべきことが求められたのです。

信仰とは時代思潮によって左右されるべきものではなく、不動にして変遷しない性質のものであります。しかし、当時の浄土宗の現状は、徳川時代以降、国民の性格を一変させるほど文物が激変しているにもかかわらず、外面的には現実的感化はなく、内面的には布教師の説教に統一を欠く有様であったため、過去から変遷しないあり方に「浄土教徒」のような杞憂を抱くことは仕方がないことであると、佐和は述べています。廃仏毀釈が行われ、西欧文明の影響を受けて大きく変わる日本において、当時の浄土宗僧侶たちは正しい信仰の保持と現実的感化救済の必要との間で深く悩んでいたことが推察されます。ドイ

ソ留学から渡辺海旭が帰朝し、浄土宗において社会事業が盛んに行われるようになりますが、その背景にはこうした信仰と社会活動に関する議論があったのです。浄土宗義の根幹といえる死後の往生浄土を軽視し、不安定な现实生活のみに注意が払われてしまうことは普遍（不変）的な価値を持つ信仰とはなりません。同様に浄土宗僧侶による社会的な活動が教義信仰に即して行われなければならないようでは、宗教者の活動としての真価を発揮するものとはなりません。後にこうした課題を踏まえた渡辺海旭や尾弁匠らにより、時代に即応した浄土宗のあり方が模索されていくのです。

参考文献

『浄土教報』

長谷川匡俊編著『近代浄土宗の社会事業―人とその実践―』（相川書房、一九九六年）

『浄土宗と福祉』（浄土宗社会福祉事業協会、一九九九年）

池田英俊・岸川博通・長谷川匡俊編『日本仏教福祉概論―近代仏教を中心にして―』（雄山閣出版、一九九九年）

(表1) 仏教における現実的感化論争

題名	執筆者名	掲載年月日	号数	項目	備考
仏教の現実的感化	豊岡博道	明治四〇年〇七〇八月一九日	七六一	社説	仏教の現実的感化の必要を論ず
「仏教の現実的感化」を讀みて 「浄土教徒の現実的感化を讀みて」を讀みて	浄土教徒 佐和円真	明治四〇年〇七〇九月二三日	七六六	寄書	未来往生よりも實際的感化事業を
浄土教徒氏に与ふ	妄想比丘	明治四〇年〇七〇二月九日	七七〇	雑纂	事業の根底は堅実な信仰
衷心の要求(妄想比丘師に對ふ)	浄土教徒	明治四一年〇八〇一月六日	七七一	教学	在劬路学匠の批判文(加藤秀旭が)
浄土教と現代思潮(上)	佐和壞山	明治四一年〇八〇二月一〇日	七八六	教学	人生(現世)向上の念仏を
再与浄土教徒氏	妄想比丘	明治四一年〇八〇二月二七日	七八七	教学	宗義の改竄ではなく拡充を
浄土宗現実的感化に就て	青木縁溪	明治四一年〇八〇二月二七日	七八七	寄書	浄土宗義の根本は未来の往生浄土
浄土教徒の君へ	寒苔生	明治四一年〇八〇二月二四日	七八八	教学	浄土教徒を厳しく批判
現実的感化に就ての所感	柳郷生	明治四一年〇八〇二月二四日	七八八	教学	妄想比丘と浄土教徒の説、双方大事
浄土教と現代思潮(下)	佐和壞山	明治四一年〇八〇三月九日	七九〇	教学	厭離穢土の現代的意義
無題	バク	明治四一年〇八〇三月九日	七九〇	心胸打開録	現実的感化の研究は急務
一味の信仰	浄土教徒	明治四一年〇八〇三月二三日	七九二	付録	現在の所信を述べる
一味の信仰(承前)	浄土教徒	明治四一年〇八〇三月三〇日	七九三	教学	佐和の厭離思想に同感

(表2) 宗義と国体の一致融合をめぐる論争

題名	執筆者名	掲載年月日	号数	項目	備考
大島教師と阿蘇艦長	往復書簡	明治四二年(一九〇九)二月一三日	八八二	付録	大島から阿蘇艦長への文書伝達①
大島布教師と阿蘇艦長(続)	往復書簡	明治四二年(一九〇九)二月二四日	八八三	雑録	大島から阿蘇艦長への文書伝達②
大島彦立氏の文を読む	さかの守	明治四二年(一九〇九)二月二七日	八八四	寄書	大島説は忠君愛国思想への迎合
さかの守氏に答ふ	大島彦立	明治四三年(一九一〇)二月七日	八九〇	文苑	国体に融和しない教えは国書
さかの守氏に答ふ(承前)	大島彦立	明治四三年(一九一〇)二月一四日	八九一	寄書	軍人布教には現世浄土を説くべき
宗門諸師に告ぐ	加藤秀旭	明治四三年(一九一〇)四月二日	八九九	寄書	在釧路港の人物、大島の過失の論評
勅修御伝講説(宗義大学報恩会)	神谷大周述 望月信道筆記	明治四三年(一九一〇)三月三日	九二四	教学	直接の批判ではないが、大島の ような巡教師の説の問題を指摘
再び諸師に告ぐ	加藤秀旭	明治四三年(一九一〇)一月一日	九二五	伝道討議	宗旨の保持が本分、救済事 業は副業
誤れる伝道	平松 真	明治四三年(一九一〇)一月一日	九二五	伝道討議	海旭氏へ時代にかなう伝道を期待
虚実論	虚心窟主人	明治四三年(一九一〇)一月一日	九二五	伝道討議	現世主義的伝道の必要を論ず
宗義問題の落着	無記名	明治四三年(一九一〇)二月五日	九三三	時事	大島と加藤が会見し意見交換

第二章 颯田本真尼と矢吹慶輝にみる福祉思想と実践

---

じょうどしゅう おし ふくし じっせん  
浄土宗の教えと福祉実践

2012年5月11日 第1版1刷発行

---

編者 浄土宗総合研究所仏教福祉研究会

発行者 竹之下正俊

発行所 株式会社 ノンブル社

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田 1-8-22-2F

☎03-3203-3357 Fax.03-3203-2156

振替 00170-8-11093

装丁・石幡やよい

ISBN978-4-903470-63-4 C0015

© Jodo Shu Research Institute Buddhist Social Welfare Project

2012 Printed in Japan

印刷製本・亜細亜印刷株式会社

---

落丁乱丁本は小社宛お送りください。送料小社負担にてお取り換え致します